

P-103

思春期・青年期の胆道閉鎖症患者の療養生活の整えを支えるケアガイドの有用性と活用課題の検討

平塚 克洋¹、瀧陽 寛子²¹昭和大学 保健医療学部看護学科²順天堂大学 小児外科・小児泌尿生殖器外科

【目的】

疾患特性や生体肝移植の可能性によるセルフケア獲得に関する問題に介入するため『自己肝にて生存する思春期・青年期胆道閉鎖症患者が自ら療養生活を整えていくための患者と親へのケアガイド』を開発した。本研究の目的は、看護職者によるケアガイドの活用で得た実践知から、ケアガイドの有用性と継続的活用への課題を明らかにすることである。

【方法】

第1段階：ケアガイドを用いた看護実践

思春期・青年期胆道閉鎖症患者と親、計12名に、ケアガイドに基づいて看護職者により、療養生活状況をアセスメントし、患者が療養生活を整える過程を支える一連のケアを実施した。ケアは、外来診療時に12ヶ月間で1例あたり5～12回行った。

第2段階：看護実践後のケア実施者へのインタビュー

第1段階終了後、ケアガイドを活用した看護職者にグループインタビューを行った。主な質問は、ケアガイドの使用感、対象者や看護職者自身の変化、日常業務への取り入れのための方略等とした。逐語録を作成し、質的分析により、ケアガイドの有用性と継続的活用への課題に関する内容を抽出し、類似性でまとめた。

所属施設、調査施設の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

ケアガイドの有用性と継続的活用への課題について、看護職者3名の実践知から4カテゴリーを生成した。

臨床現場での継続活用について「患者の生活調整への効果実感vs肝移植の可能性・親子関係への介入困難」「スタッフの意識改革vs業務ひっ迫による制約」「スタッフの意識改革を背景にした他部署連携vs組織への浸透不足による介入の中断」「ケアガイド活用に有効なチームビルドvsチームの継続・拡大の負担感」という、対になった有用性と課題が明らかになった。

有用性を増大し、課題を解決していくため、患者・家族との目標設定のオープン化、発達段階を基準とするより早期の介入、病院システムとの連動等の方略が挙げられた。

【結論】

多忙な臨床現場でのケアガイドの継続活用には、業務時間・量、活用するスタッフの勤務調整等の現実的な課題解決が必要であった。また、医師を含むチームビルドや病院システムへの導入を視野に、ケアを担う看護職者だけでなく、組織全体に対して有用性を示す方略により、ケアガイドが“良い・有効”の評価に留まらず“使える・使われる”という実装アウトカムに繋がる可能性が確認された。

P-104

重症心身障がい児の在宅レスパイトケアを初めて行う訪問看護師のための教育資料の検討

徳島佐由美¹、白坂 真紀²¹天理大学医療学部 看護学科²滋賀医科大学医学部 看護学科

【目的】

初めて重症心身障がい児の在宅レスパイトケアを行う訪問看護師への教育的な資料（題名「訪問看護師のための重症心身障がい児（以下、重症児）の在宅レスパイトケアのエッセンス」（以下、教育資料）を評価し、課題を明らかにする。

【方法】

2023年12月～2024年2月にアンケート調査を行った。発表者らの先行研究をもとに開発・作成した教育資料を、研究協力施設77施設に3部ずつ送付した（合計231部）。教育資料は、4つの大項目（「重症児を預かる前に慎重に準備をする」「現場で臨機応変に対応する」「重症児の日常に溶け込み継続する」「養育者との信頼関係を構築する方法」）に沿って合計34項目の内容で構成した。質問の内容は、4つの大項目の①利用のしやすさ（「閲覧のしやすさ」「わかりやすさ」）、②情報の充実度（「教育内容として適切か」「必要な情報が網羅されているか」）、③フォントやイラストについてである。5段階（5.非常にそう思う、4.そう思う、3.どちらでもない、2.そう思わない、1.全くそう思わない）で回答を求め、否定的な回答に対しては自由記述で意見を求めた。

【倫理的配慮】

研究者の所属する学長の承認を得て（医第174号・RRB23-040）実施し、研究対象者へ参加は任意であることを文書にて説明し、アンケートに欄を設け同意を確認した。

【結果】

52部の返送があり（回収率22.5%）半分以上が無回答であった1部を除く51部を分析対象とした。対象者の平均年齢は46.3歳（±9.2）、重症児ケアの経験年数の平均は7.6（±8.4）年であった。所属するステーションの平均看護師数は5.8人であった。4つの大項目の上記①②③の評価は平均3.55～4.45（最良値 5）と概ね肯定的な評価であった。しかし、「現場で臨機応変に対応する」という大項目の評価平均値が最も低く、その理由は「情報不足で自信を持って看護に行けない」と記載されていた。

【考察】

重症児の在宅ケアは個別性が高く、身体機能の特徴から常に容態が急変する可能性がある。小児のケアに関して経験の浅い訪問看護師が、「臨機応変に対応する」ことにつながる具体的な教育内容を検討する必要がある。

【結論】

利用者のニーズが高い重症児の在宅レスパイトケア事業の担い手を増やすため、具体的で実践に活かせる内容を含んだ資料の改良を重ねたい。